

新しい年を迎えて！

新しい令和3年を迎えた3学期の始業式の日。子供たちは、今まで以上に、元気いっぱいに登校してきました。

朝の挨拶。「おはようございます」の大きな声が、教室にこだましました。2学期に大きな成長の見られた子供たちは、その勢いに乗ったまま3学期に突入したようです。

9時ごろ、始業式が始まりました。腰骨を伸ばして、校長先生や「新年のちかい」を読む学年代表の話をしっかりと聞いていました。特に、2年生代表のYさんの話を、他の子供たちは、応援する気持ちで聞いていました。

Yさんの「新年のちかい」です。

今年、国語では、げんこう用紙3まいにすらすら作文を書くことができるよう、がんばりたいです。

今年は、大当たりのYさん。北日本新聞社の新年の作品応募で、図画の部と作文の部で「ダブル入選」を受賞し、さらに、「新年のちかい」にも選ばれました。そんな勢いを象徴するかのように、原稿用紙3枚をすらすら書くという、自分に高いハードルを設けて、チャレンジしていこうという今年の意気込みが感じられました。(※2年生からは、図画の部でRさんが銅賞、詩の部でFさんが入選でした。おめでとうございます)

2限目は、「校内書初め大会」です。限られた枚数の用紙に、自分にとって一番よい文字を書き上げようと、真剣に取り組みました。しんと静まり返った時間は、年の初めにピッタリ合った雰囲気醸し出していました。自然に緊張感が高まっていきました。一人。また、一人。書き上げた自信作を持ってきました。どこの教室でも見られる光景ですが、どれを選べばよいのか、友達に相談する子があちらこちらに見られました。書き終わると、互いの作品を見ながら、「Sさんの作品、上手だね。今年も金賞かな」「今年は、賞を取れるかな。心配だな」などと、12人のちびっ子審査員は、それぞれの作品について、楽しく会話していました。



次の日の朝、金賞のSさんや銀賞のAさんは、自分の作品を見ながら、うれしい気持ちが自然と表情に表れていました。来年からは、いよいよ毛筆です。「今度こそは、入賞したい」という言葉が、あちらこちらから聞こえてきました。

このように、次を目指そうという心意気を前面に出す子供たちの姿を見て、とても頼もしく思いました。

今年、挑戦したいこと！

3学期初めての「聴き合い」の時間。「3学期はに挑戦したいこと」について、自分の思っていることを交流しました。

- A : 私は、とび箱を8段、跳びたいです。それは、2学期にできなかったからです。
- S : 私も似ていて、とび箱を7段、8段跳びたいです。
- 先生 : Sさん、7段は、跳べていたんじゃないの？
- S : 手がうまくつけなかったり、背中を打ったりしたこともあったので、もっと上手に跳びたいからです。
- Y : 私は、二重跳び5回に挑戦したいです。それは、スモークなおで練習したけれど、できなかったからです。
- A : ぼくは、三重跳びを10回したいです。
- T : ぼくは、国語の発表をがんばりたいです。それは、スペシャルな緑金シールを取りたいからです。
- H : 私も似ていて、国語の緑金シールを取りたいです。それは、2学期、1度も取れなかったからです。

子供たちは、具体的な数値を示しながら、よりよい自分になりたいという気持ちを話していきました。数値で示したり、具体的なシールの色を目指したりして挑戦しようということは、自分の目標を明確にもっているからです。そして、できない自分からできる自分になった時の姿を心にはっきり描きながら、まっすぐな気持ちで子供たちは語っていきました。

ところが、通知表で「A」を取りたい、増やしていきたいという話が、盛り上がってきたところで、Tさんが不思議なことを言い始めました。

- T : ぼくは、音楽で「A」を取りたいです。2学期、「A」を取ったんだけど、自分では「A」とは思えない。

教室が、ざわざわしてきました。他の子供たちは、「どういうこと？意味、分からん」、「何、言いたい？もっと、詳しく言って」などと、口々に言い出しました。

- A : 「A」って、特別でないと、もらえないんだよ。欲張っているのではないの。
- C : もっと詳しく言って。
- T : 「ホップ・ステップ・ジャンプ」の音楽は、「A」だったけれど、おうちの人の前でも、うまくリズムを取れなかった。だから、自分の心の中では、「B」だと思っている。だから、3学期は、自分の心の中でも「A」と思えるようにしたい。
- C : そうだよ。先生がせっかく「A」付けてくれたんだから。
- K : そうじゃなくて、Tさんが言いたいのは、音楽の先生は「A」を付けてくれたのだけど、おうちの人の前でうまくリズムを取れなくて、Tさんの中では「B」なんだと思う。自分に納得できなくて、喜べないんだと思うの。だから、3学期は、自分も納得できる「A」を取りたいと言いたいんだと思う。



Tさんの考えを聞いた時、正直とても驚かされました。Tさんは、まだ小学生なのです。先生というエキスパートから「A」と評価されたら、無条件でうれしいと思うのが普通でしょう。それなのに、Tさんは自分を振り返って満足できなかったから、今度は自分も納得できる、自他ともに認められる「A」を取ることができるように挑戦したいと語ってきたのです。さらに、Tさんの話の意味を探ろうとする子供たちや、その意味を解釈して語ることができるKさんの聴く力に、改めて感動しました。